
メダロットHorizon

明日田理奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メダロットHorizon

【Nコード】

N8304L

【作者名】

明日田理奇

【あらすじ】

ヒノモト町に住む中学生、唐宮ミズキ。共働きの両親の意向によってメダロットを持つことを許されていなかった彼は、幼なじみと一緒に探検した裏山で一体のメダロットと出会う。

その頃巷間では、暗躍するロボロボ団の活動が噂になっていた。新たな主人公は、この世界を救う事が出来るのか！？

読んで下さっている方々へ

出来れば感想ください。モチベーションが上がると共に、至らない

点に気付いて修正する事も出来るので

はじめに

皆様初めまして、明日田理奇です。

この小説はメダロットの二次創作ですよ。分かってると思いますが……。

基本的なアウトラインはアニメ版メダロット、それからゲーム版メダロットです。

登場するのは基本オリメダ、そしてオリキャラですが、旧作のメンバーも勿論登場します。

舞台となるのは2034年のヒノモト町。ここから主人公の冒険が幕を開けます。

乱筆乱文かもしれませんが、最後までお読み下さったら幸いです。
「が、頑張りますっ」

第零話：闇夜の逃走劇

闇夜の山中を、5つの影が駆け抜けてゆく。

1つの追われる影も、4つの追う影も必死さが見えた。

「逃げるんじゃないロボ〜！」

「そうロボ、大人しく捕まらなないと酷いロボよ〜！」

「五月蠅いですっ！どうせ大人しく捕まっても酷い目に合わせる癖にッ！」

一瞬だけ黙り込んだ二人の影 - 全身タイトの様な物で顔以外の全てを覆い、サングラスで目を隠した追っ手の2人 - は、目の前を飛行するする二つの影に向かって

「「アイヴィーバット、<レフトクリープ>ロボ！」」

コマンドを飛ばす。同時に、二体の蝙蝠型メダロット（アイヴィーバット）の左腕パーツの上部から天に向かって伸びるミサイルコンテナが開き、逃走者に向かって大量の対空弾幕が発射される！

「ちッ…！」

僅かな間と地を蹴る音の後、くぐもった破裂音が連続し、

「きゃあっ…！」

少女の様な悲鳴が響いた。

がさがさがさっ！

がんっ

ぼちゃん！

足を止めて崖の下を覗き込んだ二人の影はアイヴィーバットに周辺を走査させた後、

「…ど、どうする口ボ？」

「見つからないなら仕方ない口ボ。帰ってありのままを報告する口ボ」

肩を落として立ち去って行った。

第壱話：とある出会い

「それじゃあ、私は会社に行くから、留守番よろしくお願いね」

「分かった。行つてらっしゃい」

夏だというのにチャコールグレーのスーツをかつちり着込んだ母、唐宮シヅノを見送った後、少年は軽く息を吐いてから食器を食洗機に並べてスイッチを押す。漸く一息着こうとしたその時、

「ミゝズキゝ！あーそーぼーッ！」

突然外から響き渡る声。そして

ズバァン！

しゅたたたたたつ

「おっはよお！」

「うげふツツ！？」

軽い足音の後に続くのは、異常なまでに重たいボディーブロー。自らの意思とは裏腹に少年の細身の体軀が逆くの字に折れ曲がり、そのままうずくまってしまふ。その体勢のまま顔だけを上げた少年は、

「い、痛いよカナ…。いきなり何するんだよう」

えらく情けない抗議の声を上げた。そんな少年を睥睨するのはＴシ

ヤツにホットパンツというアクティブな服装に身を包んだ少女、平安力ナ。ヘッポコ少年にして主人公でもある唐宮ミズキの幼なじみだ。彼女は腰に両手を当てたままミズキを睨み付け、

「何よ。あんたがさつさと出て来ないのが悪いんじゃない」

不機嫌さ丸出しの声でいけしゃあしゃあと言つてのける。対するミズキはもう半泣きで、

「無茶言つなよう。カナが入って来るの早過ぎるんじゃないか……」

反駁の言葉もどこか……いや普通に弱々しい。結構ダメージがきているのかふらついた足取りで立ち上がったミズキは、

「で、今日は一体何しようっていうの？」

苦々しい表情でカナに尋ねる。今までの経験から、ろくな目に会わない事も無理矢理連れ回される事も分かっているミズキは、せめて心構えだけでも済ませておこうと思つたのだ。

カナはその質問を待つてましたとばかりに満面の笑みを浮かべ、

「ミヤコ山を探検しましょ！ちなみに、異論意義反対意見は一切認めないぞっ」

「ミヤコ山！？駄目だよあそこは！野良メダロットが沢山出て危ないから、絶ツツツ対に近寄らないように、って先生に言われてたじゃないか！」

一般的良識人であるミズキは教師の言葉を盾にして反対するが、

「何つまんない事言ってるのよ。あんたには盗んだバイクで走りだし、夜中に校舎のガラス窓を割って回る様な反骨精神ってもんがないわけ？」

そんな正論が通じる相手なら、今まで酷い目に会わされていない事をすぐに悟らされた。

「もう、どうなっても知らないからね」

そして十数分後、ミズキとカナはミヤコ山の麓に立っていた。

「大丈夫よ。私にはデストとスイニスがいるんだから」

カナは不敵に笑うとメダロットチを構え、

「メダロット転送！」

高らかに叫ぶ。すると彼女の正面に二つの青い光が現れ、その中に徐々に何かの姿が現れてくる。そしてその光が消えると、

「お久しぶりです、ミズキさん」

「敵はどこだ？どこなんだーッ！」

まるで正反対なテンションで、二体のメダロットが現れた。落ち着いた口ぶりで話す黒を基調とした配色のメダロットが「ラグナ6LF」、通称スイニス。やかましい方、シルバーを基調とした配色のメダロットが「ラグナ6RF」、通称デストだ。双方共に昨年度口

ールアウトされたカミクリムシ型メダロットで、能力値の高い優秀なメダロットである。スイニスはミズキの方に歩み寄って来ると彼を見上げ、

「わたくしが申し上げても仕方の無い事ではありますが、…本当に、申し訳ございません。わたくしが至らないせいでいつもいつもミズキさんにはご迷惑をお掛けしてしまい、誠に慚愧の念に堪えません」

謝罪の言葉を述べながら深々と土下座をする。ミズキはとんでもないと言ったふうには手を振るとスイニスを助け起こし、

「君が謝る事じゃないよ。それに、もう慣れっこだしね」

そう言つてニコリと笑った。その様子をむすつとした表情で眺めていたカナはいきなりミズキの襟首を掴んで無理矢理立たせるや否や、

「ほら、さつさと探検に行くよ!」

「ぐるじい…」

ずんずん山の中へと入って行つた。

二人がミヤコ山探検を始めてから早くも十数分。蝉だの蝶だのはわんさか居るにも関わらず、この山に入つてはいけない直接の原因である野良メダロットとは一切出会う事がなかった。

「なんか、出なけりゃ出ないでつまらないわね」

「そんな事ないよ。やっぱり平和が1番だって」

カナの文句に対し、苦笑混じりに答えるミズキ。

山道はすぐ左側が崖になってるせいで油断は出来ないものの、野良メダロットさえ出て来なければそこまで気にする程ではないとミズキは考えていた。しかし。

ずるっ

「……え？」

「ッ！？ミズキっ！！」

突然足元が滑り、ミズキの身体が宙に投げ出された。

『やっべー。死ぬかも……』

全てが有り得ない程のスローモーションで流れてゆくなか、不思議と落ち着いた思考でそこまで考えた所で、

がんっ！

「みつ…ミズキーーーーッ！」

彼の意識は、闇に閉ざされた。

一体どれ程の間気を失っていたのだろうか。一瞬といわれればそんな気も、一日といわれればそんな気もする。

ミズキが目を開けた所は、崖の下を流れる川のすぐ横であった。酷く痛む身体を何とか起こし、怪我がないかを確かめてゆく。

『どこも折れて無いみたいだ。奇跡的だな』

あちこちに擦り傷こそあるものの、どうやら骨折は免れたようだ。その事実を確認した事で冷静な思考能力を取り戻したミズキは、改めて周囲を見回す。特別何も無いみたいだが、などと思いながら後ろを振り返り、

「うわあっ！」

無造作に地面に転がっているメダロットを見つけ、慌ててその場から離れた。

「な、何でこんな所にメダロットが転がってんだよ……」

どうやら機能停止しているらしくピクリとも動かないが、それはそれで何か不気味だ。もしかしてやばい野良メダロットでも居るんじゃないかとばかりに落ち着き無く辺りを見回したが幸いそんな様子は無い。それを確認した所で再びメダロットに視線を戻したミズキは首を捻った。

『こんなデザインのメダロット、見たことないぞ。ひょっとして試作機なのか？』

だいぶボロボロになってはいるが、やはりミズキはこんなメダロットを見たことが無い。両親がメダロットの所持を許してくれないので、メダロット研究所に勤める従兄弟や、メダロット社で働く母親から、新型機のパンフレットを貰っていたミズキだからこそ分かつ

た事だ。おつかない事はおつかないが、好奇心が先立った彼は謎のメダロットを調べ始めた。

『損傷が酷いな。機能停止してるみたいだ』

一人で勝手に納得したミズキは、ふっと視線を脇に落とす。そこにあった物を手に取ったミズキは驚愕に目を大きく見開く。

「これは…クワガタメダルじゃないか！」

世界中に数枚しか存在せず、コピーメダルも存在しない伝説級のレアメダルを拾い上げたのだ！

「何で、こんな物が此処に…？」

ミズキはメダルとメダロットの双方に視線を送ってから、

「やっぱり、あいつの…だよな」

唯一つの結論へとたどり着く。恐る恐る白い残骸へと近付いたミズキは背中にある筈のメダルを格納する窪みを探す。

「あれ？何で無いんだ？」

しかし、そこにある筈のものはいくら探せども見付からず、ミズキは首を傾げる。

「一体全体どうなってんだ？」

一人ごちたミズキが再び首を傾げた直後、

どくん…

「なっ、何だ？」

どくんっ…！

彼の手の中であつたメダルが、拍動と共に強く瞬いた。規則的に拍動を刻み続けるメダルを放心した様に見つめていたミズキは、

「ッ！？…ああああああッ！！」

いきなり右手首に襲い掛かつて来た焼け付くような痛み、思わずのけ反つて獣の様な絶叫を上げた。ずきずきと痛む手首を押さえ、荒い息を吐き出すうちに、徐々にではあるが痛みが落ち着き始めた。涙の滲む目で押さえていた手が隠していた所を見る。そこには、

「何だよ、これ…？」

漆塗りの様な黒で刻まれた、「HVN-3XWR」の文字。そして、

「Seraph」…？何だよ、これ…！」

叫んだはずが、掠れたうめき声しか出てこない。

未知の状況に、思考が全く追いつかない。何で僕がこんな目に…！
そんないらえがある筈も無い言葉が浮かんだその時、

「あ、あのお…。それ多分、私のせいです」

思いもかけない方向からの答えが。咄嗟に声のした方へ向き直ると、

「き、君は…?」

「私は「セラフ」といいます。…多分」

さっきまで横たわっていたはずのメダロットが立ち上がった。

「多分って…」

「だって、よく分からないんですもの。」

「いや、開き直られても…」

ミズキが呆れ顔でそこまで言うと、

「仕方にやーでよーッ！うちかてようよう分からんねんもん！ほんにおかしい言うがはあんたみたいな奴ぜよ！」

ブチ切れたセラフが意味不明な言葉遣いでまくし立てる。すっかり面食らってしまったミズキはきょとんとしながらも、

「いや、だからと言って開き直られても…」

一応ツツコミを入れた。

別の時刻、別の場所で。

レアメダルの回収を済ませた快盗レトルトは、自転車で帰途に着い

ていた。今や家庭を持つ身である彼にとって快盗稼業はあまり好ましいものではないのだが、それでもメダロット世界の発展の為に自らに言い聞かせ、仕事を続けているのだった。

『今日は鯖の味噌煮だったかな？楽しみだ』

早くも帰宅後の事に考えを巡らせる彼の耳に、

「こんばんは、快盗レトルトさん」

響く陽気な少年の声。そして

「いきなりだけど、さよならだ」

「くっ…！」

聞き慣れた、火薬攻撃の発射音。反射的に自転車から飛び降り、同時にメダロットを転送する。
爆発、轟音。そして

「へえ、今のを避けるなんて流石だね」

ぞつとする程に酷薄な響きを孕んだ声。レトルトの精神は、一瞬で臨戦態勢へと移行する。

「快盗レトルトとアークビートル。いや、伝説のメダロッターあがたヒカルと、そのパートナーめたびー。と呼んだ方がいいかな？」

「…」

沈黙を肯定ととったのか、少年の言葉は続く。

「初めまして、だよな。俺の名前は天地帝國。知ってるかい？」

「残念ながら、知らないな。まさか三原則を外したメダロッターがまだ残っていたなんてね」

煙が晴れた先に立っていたのは、飄々として掴み所のない雰囲気を纏った銀髪の少年と、

『ドンドグー…？いや、違う。あれは、なんだ？』

獣王にも似た禍々しさを放つメダロットだった。形状こそドンドグーに酷似しているものの、明らかにパーツが攻撃性を孕んでいる。警戒心を強めるレトルトの横で、彼の愛機であるアークビートルも臨戦態勢を崩さないままに様子を伺う。そんな彼らの姿を滑稽に思ったのか、帝國は突然くつくつと笑い始めた。

「そんなに警戒する事あ無いだろう。今日は飽くまでご挨拶に来ただけだよ」

「奇襲を仕掛けておいてそれか？それこそんだ“ご挨拶”だな」

皮肉で返された彼は別段不機嫌になるでも無く苦笑いを浮かべる。

「こりゃ一本取られたな。…ま、良いや。さっさと本題に入ろうぜ」

「本題？」

「メダロッターが出会ったんだ。やる事と言ったら一つだろう？口

ボトルだよ」

帝國の口から“メダロッター”の六文字が放たれた直後、レトルトから、いや、あがたヒカルの全身から凄まじいプレッシャーが放出され始めた。それは殺気と呼んでも差し支えの無いもので、

「へえ。あんた、そんな“顔”出来るんだ」

その殺気にあてられた帝國の表情が凶悪に歪む。

「僕はね、三原則を外した輩がメダロッターを名乗るのが一番嫌いなんだ。馬鹿にされているみたいでね。だから、さっきの台詞は取り消してくれないか？」

「断る。と言ったら？」

「君の事を、全力で潰させて貰うよ」

「そおかい。なら、お断りさせてもらっぜ」

二人の間を一陣の風が吹き抜けた刹那の後、

「アークツ！《イグニッション》だ！」

アークビートルが動く。右腕の銃口が火を吹き、放たれた銃弾が直撃する！

「やるな。アンジェラス、《スピルサイド》だ」

しかし帝國は動じる事も無く反撃を開始する。彼の声に応じたアン

ジェラスが左腕をゆらりと動かし、大量のミサイルをばらまく。対空弾幕にも等しいその攻撃を、

「《エクспロード》ッ！」

アークビートルは針に糸を通す様な正確さで迎撃してゆく。

「すげえな、流石は最強のメダロッターだ。俺の予想を凌駕してるぜ」

しかし、その光景を目の当たりにしてもなお、帝國の表情は喜悅に歪む。そしてヒカルは、戦闘を継続しつつもある隙を探り続けた。

「アンジェラス、《アンヘルサイド》右2クリック修正。撃て！」

「アーク！かわして《エクспロード》！」

右腕から放たれる漆黒の重力球・プレス・を横っ飛びに回避して、返す刀でガトリングを発砲。

「《スピルサイド》で迎撃だ！」

それを今度はミサイルが叩き落としてゆく。

響く轟音と、立ち込める爆煙。その結果生じた、一瞬の空隙。それこそが、ヒカルの求めていた物だった。そこに付け込むべく、彼は愛機の名を叫ぶ！

「今だ！アークッ！」

マスターの声に応じたアークビートルの二本の大角が、淡い光を帯びる。同時に両肩から伸びる粒子加速器からも低い唸りが響き始め、

「行くぞ！…必殺ッ！《プロミネンス》ッ！！」

爆発的な衝撃波と共に、闇を切り裂く一条の閃光が迸る！その一撃は一瞬で敵との間の距離を詰め、

「《ロードサイド》！」

しかし剣は届くこと無く、直前に放たれたもう一条の閃光に阻まれてしまった。

『アークの《プロミネンス》と同等の出力だと？』

仮面に隠れたヒカルの頬を、冷や汗が伝う。一発限りの必殺技を防がれた以上、残る大技はメダフォースのみ。だが、それを使わせてくれる程甘い相手ではないこと位は重々承知している。そんな彼の焦りを知ってか知らずか帝國は愉快そうな笑い声を上げ、

「かはは、やるじゃねエか。ま、今日の所はこんなもんだろ」

にやりと笑い、アンジェラスを収めた。真意を計りかね、ヒカルは眉を顰める。

「どういう、積もりだい？」

「言つたる？今日はただの“ご挨拶”だって」

からからと笑った帝國は踵を返すとひらひら手を振り、

「あばよ、また会おうぜ。今度はロボロボ団首領として、になるだろっよ」

「待て! どういう事だ、それは!」

ヒカルの質問には答えずに去って行った。

第貳話：ファーストロボトル

その後も要領を得ないやり取りを続けていたミズキとセラフだったのだが、カナが涙目のままミズキにドロップキックを見舞った為に、強制的にお流れとなってしまうた。

所変わって公園の中、状況説明を聞き終えたカナは眇にセラフの方を見遣り、

「ふうん。じゃあ、その子は記憶も何も無い訳ね」

続けてミズキに視線を送る。ミズキはこくりと頷き返し、溜息を吐く。正直言っただけからどうするかの見通しが全く立っていない状況なんだけどなあ…などと思い悩んでいると、

「やあやあミズキ君。久しぶりだねえ」

いきなり後ろから響く調子の良い声。そして

「あらあ？カナも一緒じゃなあい」

「うげ…」

響くのは、相手を小馬鹿にしたような口調。

「何の用よ、中二病トリオ」

カナが心底鬱陶しそうな表情で吐き捨てると、小馬鹿にした口調の主は額に青筋を立てて怒り始め、

「中二病トリオって何なのよう！アタシ達にはエンパイアーズっていう立派な名前があるのよお！」

ぎゃあぎゃああと喚き始めた。

……彼女達の名は“エンパイアーズ”。ヒノモト中学で知らぬ者はいないとまで言われる不良？三人組だ。短気な娘っ子が、リーダーを勤める鎌倉スミレ。調子の良い喋り方の少年が室町ヤマト。そして、

「よだきいけえ、帰ってええか？スミレ」

「はあ！？駄目に決まってるでしょお？」

「ええ〜？」

全くやる気を感じられない狐目の少年が、三人目の江戸前ケンジである。

ユカイな漫才を繰り広げる中二病トリオが目にと止まったのだろう、セラフはミズキの方へとことこ歩いて行き、

「マスター、あの漫才士の方々は誰ですか？」

結構な声量でマスターに推何した。ミズキは慌ててセラフの口があるらしき場所を押さえたが時既に遅く、

「へえ。あんた、メダロット手に入れたんだ」

「…まあね」

スミレがミズキを睨み付ける。そして、

「ヤマト、ミズキに口ボトルを教えてやりな！勿論、“真剣”でね」

「わかりやした、姐御！転送、「タツプリザード」！」

ヤマトの方を見ずに命令する。彼は愛機を転送すると始まる前から勝利を確信した笑みを浮かべ、

「悪いな、姐御の命令なんでね」

「おまつ、お前え！これっぽっちも悪いなんて思っていないだろ！」

ミズキの叫びも虚しく響くだけだ。もはや諦めの境地に立った彼は溜息を吐いてセラフの方へ向き直る。

「というわけなんだけど、協力してくれるかい？」

「分かりました。任せて下さい、マスター」

セラフが頷いて臨戦態勢に入った瞬間、

「うわっ！？」

「？」

ミズキの視界の中に、直接セラフのデータが写り込んで来た。周囲が訝しげにしているので慌てて取り繕うと、

「合意と見てよろしいですねー？」

「……うわっ！」「……」

今度は四人同時に驚きの声をあげた。いつの間にか現れていた謎の男性はすつくと立ち上がるや否や

「私は世界ロボット協会公認レフェリー、ミスターうるちです。只今このロボットは真剣ロボットに認定されました。両者準備は良いですか？それでは、ロボットうー、ファイトおーッ！」

いきなり仕切り始めた。一瞬思考停止したミズキとヤマトだったが

「タツプリザード、《ドランクレーザー》！」

「ッ！？避ける、セラフっ！」

いきなり放たれた一撃を紙一重で躲すセラフ。

「フットワークはこっちの方が軽い！無理に攻めないで隙を伺うんだ！」

「はいっ！」

『相手の攻撃は威力こそ高いが、初動も遅いし撃った後の隙もかい。狙い目は左腕攻撃の後かな…？』

ミズキがそんな事を考えていると、

『分かりました！』

セラフの声が頭に直接響いた。困惑するミズキだったがすぐに戦闘に集中し直し、

『今のうちに索敵で相手の装甲の弱点を探っておくんだ。隙が出来てからじゃあ遅いぞ！』

『了解ッ！』

セラフが索敵を使うと、ミズキの視界にもタップリザードの弱点がはっきりと浮かび上がって来る。

「ちっ…！タップリザード！《ブロイルレーザー》！」

一切攻撃が当たらない事に苛立ち始めたヤマトが叫び、タップリザードが左腕を構えて充填を始めた瞬間だった。

「セラフっ！《ノーリッジ》だ！」

遂にミズキが動きを見せる。彼の叫びに応じたセラフは、勢い良く走り出すと最低限の動きで放たれたレーザーを回避。それと同時に力強く大地を蹴り、

「…ッはああああ！」

落下の勢いを乗せ、タップリザードの頭部にハンマーを叩き付ける！

ミシッ…

ビキッ……！

「そ…んな」

【タップリザード、頭部パーツダメージ80。機能停止します】

無情なアナウンスと同時にタップリザードのカメラアイから光が消え、

「機能停止！ッ！勝者、唐宮ミズキッ！」

「馬鹿なあゝ！？」

ヤマトが崩れ落ちる。額に青筋を浮かべたスマレは勢いよく後ろを振り返り、

「ケンジい、次はあんたの番って寝てるし！」

絶叫するが早いか、ベンチにひっくり返っているケンジの肩を掴んでがつくんがつくん揺さぶる。しかしまあ案の定起きる気配は全く無かったが。

「…」

「……………」

「……………あのお」

「うがあっ！」

その場に流れた微妙な空気を振り払うかのように叫んだスマレはミズキをびしいッ！と指差し、

「アタシが直々に相手してあげるわ！覚悟しなさいよお」

メダロットを転送する。現れたのは白いカラーリングの獅子型メダロット、「ビートリオン」だ。KLNの型式番号を持つこの機体は停止格闘を得意としており、

「KLNも堕ちたものね」

「そこっ、聞こえてるわよお！」

「知ってる。聞こえる様に言っただもの」

「なんですつてえ！？」

…まあ、カナの評価が全てを物語っている。「ペツパーキャット」にKLNの型番を与えただけの手抜き機体と揶揄される上に、

「女型ティンペット対応なんだから、せめてQLNじゃないのかなあ」

「やかまし〜い！！つべこべ言わずにロボットなさいよお！」

ひええ。

ま、とにかくお互いが戦闘準備を終えたところで

「では、ロボットら〜、ファイトおーっ！」

戦いの火蓋が切って落とされた。

『セラフ、《ウィズダム》！』

先に動いたのはセラフ。姿勢を低くして駆け出すと、

「セイツ！」

「リオン！ガードするんだ！」

ギン！

激しい衝突音と共にリオンの左腕にソードが食い込む。装甲に亀裂が入るが、そこまでだ。左腕を切断するには至らず、しかし退く事も叶わない。

「ちっ…！」

「セラフ、退けえ！」

スマレはにやりと笑い、

「詰めが甘いわよお？リオン、《サンダーファング》ッ！」

命令を下した。同時にリオンの右腕とようやくソードが外れたセラフが動く。バックステップで回避しようとしたセラフの右腕にリオンの爪がかすり、

バチッ！

「ぐ……ッあああああ！」

閃光と共に響く激しいスパーク音。その衝撃で弾き飛ばされたセラフはゴロゴロと地面を転がり、

【セラフ、右腕パーツダメージ15、停止ペナルティが付加されます】

「か、軀が…」

『しまった、今でヒューズが飛んだか…？』

かすただけならなんとかなると思っていたミスキだったが、それは思い違い、というよりも判断ミスだった様だ。

「あんたは直撃さえ避ければどうにかなるって思ってたみたいだけどお、それは甘いつてもものよお？」

「そんな事、見れば分かるよ…！」

時間稼ぎの積もりで言葉を繋げるミスキ。視界に写るセラフのデータを睨みながら必死に打開策を探って行く。

『唯一の救いは直撃じゃ無かった事だ。お陰で回復は早い…気がする』

『気がするってなんですか、マスター』

『……………いいか、セラフ。自分の事だし分かってるだろうけど、もう後10秒位で停止症状は解除される。リオンが近付いて来てもギリギリまで動けない振りをするんだ。勝負を掛けるとしたら、まず、そこしか無い』

『分かりました』

「さあて、あんまり話し込んだじやうと停止症状が解けちゃうしい、
続けよおかあ？」

勝利を確信しているのか、ゆったりした足取りでセラフとの距離を
詰めてくるリオン。

5…

4…

3…

2…

『まだ、まだだ…！』

1…
……

0ッ！

症状が解除されると、リオンが最後の一步を踏み出したのがほぼ
同時。

「リオン、《アーチヴォルト》ッ！」

リオンが帯電した左腕を大きく振りかぶって、

「今だ、セラフッ！《ノーリッジ》！」

いきなりセラフの足が動き、リオンに足払いを掛ける！そしてバランスを崩して前のめりになったその頭部に向かって、

「はああああああッ！！」

アッパーカットの要領で必殺の左拳を叩き込む！

タップリザードの時より数段鈍い音が響き渡り、打ち上げられたリオンが宙を舞う。その軀が地面に付かないうちに

【ビートリオン、頭部パーツダメージ75、機能停止します】

アナウンスが響き渡る。そして、

ドシャ…

「機能停止ッ！勝者、唐宮ミズキ！」

「やった…！やったよセラフッ！」

初めてのロボットで二連勝。流石に嬉しかったのだろう、ミズキはセラフと抱き合いながら跳びはねている。それに何より、

「メダランク97位のアタシが、初心者に負けるなんて……………」

常にランキングの底辺をさまざましているヤマトに勝ったのならともかく、上位組に名を連ねるスマレに勝利したのだ。これは相当な快挙である。

わなわなと震えていたスマレは若干涙目のままビシッ！とミズキを指差すと

「まぐれとはいえ勝ち。それは認めてあげるわよ。けどね、勝ち逃げ出来るなんて思っんじゃ無いわよ！」

「ま、待つて下さいよ姐御お〜！」

負け惜しみの御手本みたいな台詞を吐き捨てて走り去ってしまった。

残されたケンジは全く起きる気配が無く、ミスターうるちも現れた時同様突然去ってしまったせいで、公園の中にはつかの間の静けさが訪れた。その中に佇んでいた二人だったが、やがてどちらともなく

「帰ろうか」

「そ、だね。今日は疲れたよ」

そんな言葉を切り出したのをきっかけにして、帰宅の途に着いた。

「大変だったね〜」

そう言つてカナが笑うと、ミズキは苦笑で返し、

「いや、正直これからの方が大変だよ。どうやってセラフの事を説明したらいいか…」

深い溜息を吐いた。

第式話：ファーストロボトル（後書き）

.....
戦闘が、短い……ッ！

「いや、そんなに力強く発言する所じゃ無いですからね、今の台詞」
んな事分かってらい。

まあ、今回から後書きを始める訳だが、それに当たって毎回ゲストを呼ぶ事にしました。今回は記憶喪失天然娘ことセラフちゃんです！わーわー！どんどんっ！ぱふぱふっ！

「虚しくありませんか、それ」

んな事分かってらい

尺の問題があるから手短にいくぞ。次話はセラフがミズキと同棲出来るかの境目だからな。気合い入れて行くだぜ！

「同棲つて。そんな疚しい臭いがする言葉を使う所なんですか？」

ふふふセラフよ。お前はまだ知らなくてよいのだよ。

「そんな言い方されると、逆に気になりますよ」

ああっ尺がもつない！それでは皆さん、さらばだーっ！

「ちょっと作者！私の質問に答えてく（ry」

第参話：説得に関する天佑（前書き）

非常にまずい………気がするけどなあ。

旧作キャラが出てくるけれども、キャラクター崩壊の可能性が無きにしもあらずなので、やな予感がする人は読まないのが賢明かもです。…まあ、そこまで酷いってことは無い筈…たぶん

第参話：説得に関する天佑

帰宅したミズキは自分の部屋にセラフを隠して

「いいかい？僕が良いって言うまで出て来ちゃ駄目だよ」

と言い含めておいて、自らは階下に降りて夕飯の準備を始めた。炊飯器に釜を入れ、スイッチを押そうとした所で、

プルルルル…

プルルルルル…

電話がかかって来た。慌ててエプロンで手を拭ったミズキは受話器を取る。

「どちらさまですか？」

「ミズキ？母さんよ。…あのさ、突然で悪いんだけど、今日会社の人が家に飲みに来たいって言い出しちゃって。だからね、お酒はあたしが買ってくから、ミズキは料理、あと二人分追加でお願いね」

「え！？ち、ちょっと母さん！そういう事はもうちょっと早く言つてよ！」

「ごめんごめん。今度から気をつけまーす」

ホントにそう思ってたのかとツッコミたくなる母の声に思わず溜息を吐きながら、ミズキは受話器を置く。その直後、

ブルルルル…
プル

「もしもしっ！どちらさまですかッ」

「どうしたミズキ。何もそんなに怒らなくてもいいじゃないか」

「何だ、父さんか。で、何の用？」

「いや、実はな。今日私のゼミに出てる奴らが家で飲み会やりたいって言い出してな、ついその場のノリでOK出しちゃったんだよ。だからミズキはあと二人分の料理を追加で用意しといてくれな」

もうミズキには何も聞こえていなかった。

何も……

何をどうしたのかは全く覚えていないが、気付けば無駄にでかい食卓には計7人分の料理が用意されていた。そして

「ただいま」

「なんだミズキ、母さんも誰か連れて来るって言ってくれたらやめたのに」

まるで謀ったかの様にぴったり同じタイミングで、両親が帰って来た。その後ろには、

「わあ、すごい料理だねえ」

「やば。私より上手いかも」

母の同僚であるあがたヒカル、キララ夫妻（なんかすんませんby
作者）そして

「やるなあ、ミズキ君」

「教授、いいお子さんじゃあないですか」

父の生徒である天領イツキと、助手である浅野^{アサノ} 霞^{カスミ}が入って来た。

「いらっしやい、皆さん。たいした料理も出来なかったですけど、
くつろいでいって下さいね」

ミズキがにこりと笑って客人を席に誘導する。全員が席に着き、乾
杯の音頭がミズキによって取られた事で、食事が始まった。

「大学はどうだい？イツキ君」

尋ねたのはヒカルだ。イツキはせわしなく口をモグモグやりながら、
「楽しいですよ。メダロットによる火星のテラフォーミング計画プ
ランが、結構良いところまで出来上がってるんです」

そう答え、今度はビールを煽る。

「そういえば、クラスターが正式にオープンするって話だけど、カ
スミ君は何か聞いてない？」

今度はキララが口を開く。カスミは一旦箸を置いてから、

「シデンからオープンセレモニーに参加してくれ、って話は貰いましたよ。今年の世界ロボット選手権はクラスターでやる事も決まったみたいと言っていましたけど」

流石に礼儀は心得ているのだろう。折目正しい姿勢で答えた。

「そういえば、メダロッターランキング1位のアベカワ キナコさんがミストラルとゼロスーサイドを使用してるって噂、どうやら本当みたいだね」

唐突に、ヒカルが口を開いた。

「知ってますよ。この前手合わせ願いましたからそれに、幻帝も所持していました」

意外に落ち着いたカスミの声に、むしろ呆氣に取られたヒカルは、

「じゃあ、どうだったんだい？」

興味津々といった風に推何した。

「ミストラルは、やはり“彼”でした。色々積もる話もあったんですが、あちらさんにその氣が無かったみたいで…」

割と淡々と話をしているように見えたカスミだったが、ミズキには、彼の瞳の中に一抹の寂寥がよぎった様に見えた。ヒカルもそれに気付いたのか、話題を変えようと口を開いた、その直後

「きゃあああああああッ!？」

二階から絹を裂くような悲鳴が上がり、全員が同時にむせ返った。

「な、何だ!？」

『セラフの馬鹿…ッ』

ミズキは唸ると同時に席を蹴り、二階に向かって駆け出した。

自室に飛び込んだミズキはセラフに駆け寄り、

「どうしたっ!？」

勢い込んで推何する。対するセラフは指をミズキの背後に向け、

「ゆ、ゆ、幽霊が…!」

途切れ途切れに言葉を発した。ミズキがぎこちない動きで後ろを振り返ると、

「こんばんは」

「ふぎゃあああああああああッ!？」

なんだかはつきり見えすぎている気はするものの、浮いているから
一目瞭然。幽霊がそこにいた。幽霊はミズキの叫びなどお構いなしに

「わたくし、ミュー・ソーサラーと言つ者ですわ。どうぞ御見知りおきを」

そのいかにも外国人といった風な、陶器の如く白い肌や、明るめの紫色の髪からは想像もつかない程流暢な日本語で自己紹介を始めた。

「しかし、貴方がセラフのパートナーだとは思いませんでしたわ。これでは少しばかり“改造”する必要がありますわね…」

「あのお、“改造”って、一体何の事ですか？」

ミズキの問い掛けなどまるで最初から無かったかの様に考え込んでいたミュー・ソーサラーは、

「貴方には、この子と生死を共にする覚悟がありますの？」

唐突にミズキに問い掛ける。突然の話題の変化に着いて行けない彼は首を傾げるが、相手はそんな事にはお構いなしで、

「貴方には、セラフと生死を共にする覚悟はお有りですの、と聞いているのですか？」

言葉を重ねてゆく。

「あのさ、それって今すぐ決めないといけない事なの？僕はまず両親を説得しないといけないんだけど」

恐る恐る発せられたミズキの問いは、

「今すぐ決められないと言つのなら、私はこの子をしかるべき人

物の下に送り届けるだけですわ。両親の意思など、関係ありませんの。現に、今は登場をご遠慮願っている状態ですもの」

呆気無く握り潰された。言われてみれば、さつきから両親やヒカル達が上がってくる気配が一切感じられない。その言葉に憤慨したのはセラフで、

「私の意思はどうなるんですかつ！」

勢い込んで詰め寄ると、激しい語調で詰問する。

「さあ、お早く決断なさいませ」

セラフの叫びなど意に介さず、ミュー・ソーサラーの問い掛けは続く。

「……解りました。その問いの答えは、YESです」

「マスターッ!？」

「これから何をやらされるのかは知りませんが、セラフは僕の大切なパートナーです。だから、どんな事が起きても、乗り越えて見せます」

強い決意の籠ったミズキの瞳を見たミュー・ソーサラーはにこりと笑い、

「よろしい。なら、わたくしは貴方にしかるべき改造を施してから立ち去る事にしますわ」

そう言つて踵を返す。

「そついえば、その“改造”っていうのは一体何なんです？」

ミュー・ソーサラーはその問い掛けには答えず、

「では、ご機嫌よう」

別れの挨拶をすると同時に部屋の中が爆発的な光で埋め尽くされ、それが収まつた時には彼女の姿は消えて無くなっていた。

ミズキが「何だつたんだ？」と言おうと口を開くのと、セラフが再び驚愕の悲鳴を上げかけると、シヅノと父、カズマやヒカル達が部屋に雪崩込んで来るのがほぼ同時で、そしてミズキの姿をみた本人以外が同時に、

「……誰だお前はッ！？」

叫んだ。ミズキは小首を傾げて、

「？」

何故か短かつた筈の自分の髪が肩を越える程に伸びているのを視認し、勢いそのまま視線を下に落とす。

いきなり少し大きくなつたシャツの襟の中に見える、自分の胸板であつた筈の所には、ささやかに存在を主張する柔らかそうな双丘が。嫌な予感が背筋を走り抜けたミズキは慌てて壁際に置いてある姿見に駆け寄り、

「あ……………！」

自分の物とは到底思える訳も無い程に

かわいらしい少女の姿が鏡に写っているのを、しっかりと見てしまった。

「成る程。じゃあ君は、やっぱりミズキ君なのか」

その後、なんとか説明を聞いて貰ったミズキは全員を納得させる事に成功し、ついさっき現れた幽霊や、セラフの事を説明していたのだ。ヒカルは首を捻りながら

「またしても宇宙メダロットか…」

溜息を吐く。マザーといいミストラルを筆頭とする俗称“木星メダロット”といい、面倒を引き起こしている事には変わり無いのだ。同じクワガタメダルだからと言う事でカスミのルミナススタッグ（愛称：ルミナ）に遊んで貰っていたセラフを見ながら、ミズキの心中は穏やかでは無かった。

『生死を共にするって、あいつは言ってた。これから何か、危ない事が起きる気がする…』

柳眉を歪めて思考を働かせるミズキ。そんな彼…いや彼女を横目に見ていたキララが、

「それにしても、ミズキ君可愛くなったよねー」

いきなり放った爆弾発言。ミズキは耳まで真っ赤に染めると、

「なっとな何言ってるんですかキララさんっ」

際限無くテンパリながら悲鳴じみた声を上げる。相変わらず酒を煽っていたイツキはにやにやと笑い、

「確かに確かに。俺も昔はアリカの奴に女装させられまくってたけど、ミズキ君はその比じゃあないからなあ」

からからと笑い出した。收拾がつかなくなる予感がしたミズキはやや慌て気味に、

「それよりもっ、今日はもう遅いし、帰らないとまずいんじゃないですか？」

等と言ったが、ヒカルとカスミは思考に没頭しているし、シヅノとイツキ、カズマは酒盛りを継続中。さらにキララは相変わらずミズキの方をニコニコしながら見ているしで、つまり全員が彼女の意見に耳を傾けてはいなかったのだ。ミズキはがっくりと肩を落とし、

「ボク、もう寝て来ます……」

とぼとぼと宴の部屋を後にした。

第参話：説得に関する天佑（後書き）

ひゃっはー！後書きだぜ後書き！今日のゲストは突然おにやのこになった唐宮ミズキ君だぜっ！

「貴方が、作者ですか…！よくもボクをこんな目に逢わせてくれましたね！」

ふふふどうだ参ったか！これこそ私が望んでいた事なのだ！

「昔書いてたバージョンの時は、ずっと男のままだったじゃないですか！あの時は一人称も“俺”だったし…」

君の一人称が変更されたのは、ここに理由があったのさ。

「くそう、この変態め……」

はははもつと褒める

「駄目だこいつ早く何とかしないと…！」

そっいえば、君の服どうしようかな？

「…え？」

折角可愛い女友達がいるんだし、お買い物に行ってもらっていうのもありだよな？

「えーと、そのお…本気？」

ああ、大マジだ。…カナのセンスってどんなんだろうな。ゴスロリとかメイド服とか着せられたりしてな？

「やだーっ！」

後、いつまでも風呂に入らないのもまずいよな

「あきやーッ！？」

幕間巻：四機の“黒”

「久しぶりだな、カスミ」

「そうだね、シデン」

メダロポリスの外れで、かつての友は再会を果たした。ロボトルリサーチ R R社の代表ムラサメ シデンと、かつての英雄アサノ カスミ。シデンがクラストーから帰還するという報せを受けたカスミは、予定を合わせて再会の場を設けたのだ。シデンは相好を崩すと戦友の手を握り、

「調子はどうだ？」

近況を尋ねる。カスミは得意げに鼻を鳴らし、

「火星のテラフォーミング計画は順調だよ。もうじきテストをしようかって所まで来てるんだ」

饒舌に語った。

「じゃあ、本格参入って段になったら、うちも一枚噛ませて貰おうかな？」

上機嫌なシデンがそこまで言った直後、

圧倒的なスパークの奔流と同時に、“二人”の人影が現れた。

「……ッ！？誰だっ！」

シデンは反射的に後退りながら推何し、同時にメダロットを転送する。彼の前に現れたのは真紅のボディを持つ重装甲のメダロット、「カイゼルビートル」だ。その威容を目にした二人は大して驚くでもなく、

「ここは…メダロポリスですかね。随分離れた所に放り出されたものだ」

青い髪の少年が独り言の様に呟く。

「無視…か。嘗められたものだな」

シデンの押し殺したような唸り声で漸く気付いたそぶりを見せた青い髪の少年はにこりと微笑み、

「おっと、これは失礼。私はセルリアーノといいます。そしてこちらがエレクトラ。よろしくお願いしますね、カスミさん、シデンさん」

軽く会釈をすると自己紹介をし、さらに隣の不良のような少年も紹介した。

「何故、俺達の名を知っている？」

「僕達に、知り得ない事はない。それだけの話ですよ」

柔和な微笑みを浮かべる少年の表情は、しかし本当の感情を一切垣間見せようとはしない。と、

「カブト、メダル…！」

エレクトラが、初めて口を開いた。その見た目に反して声は少女のようで、カスミ達は軽く面食らってしまう。さらにエレクトラはカスミに視線を向け、

「お前は、クワガタメダル…！」

強い憎しみが籠った唸り声を上げると、一機のメダロットを転送した。それを見たシデンが、今度は唸り声を上げる。

「ブラック…スタッグ！」

その全身から放たれるプレッシャーが、チリチリと音を立てて聞こえてくる程の存在感。百戦に遅れを取った事の無いカイゼルビートルが、ほんの僅かに軋むような唸りをあげ、そしてジャカツ！と音を立てて砲塔のような銃身を構える。更に、

「ルミナっ！？」

初めて、ルミナが勝手に転送して現れた。無言のまま、漆黒のKW Gを威圧するように睥睨する。

「一戦、交える積もりですか？」

セルリアーノの問い掛けに、シデンは肩を竦めて答える。しばらく沈黙していた青髪の少年は、やがて一つ頷くと、メダロットを転送した。漆黒のボディを持つその機体は、

「わかりました。では、ロボットを始めましょう」

「ブラックビートル」。こちらもやはり、最強の一角に名を連ねるメダロットであった。

一同に会した四機の“黒”。そのいずれもが圧倒的な戦闘能力を持ち、尚且つ兇悪なまでの戦闘狂でありながら、いまだに動きを見せてはいない。狂おしい沈黙を破ったのは、

「待つてなんかいられつかよ！」

やはりBスタッグであった。圧倒的なスピードでルミナに突貫を掛けると、

「《ブラックバイス》！」

激しく風を巻きながら、鋭い斬撃を振り下ろす！

「ルミナ」

「承知」

対するルミナはゆらりと動いてブラックビートルの一撃を回避し、

「…っ痛ああ！」

【左腕パーツダメージ29、損傷甚大】

瞬時に背後に回り込むと同時にブラックスタッグの左腕を切り付けた。

「ぎやはははっ！いいねえ、やるじゃねーか！気に入ったぞ手前エ！」

上機嫌に笑うブラックスタッグを睨みながら、ルミナは右腕のソー
ドを構える。軽く刃零れを起こした刀身は、斬撃の凄まじさと相手
の装甲の頑丈さを物語っている。一方のカイゼルビートルは、

「ちいッ！」

僅かに劣勢に立たされていた。無論、攻撃が当たっていない訳では
ないが、変形前のこの状態では決定打に欠けるのは事実だ。相手も
同じ事を考えていたのだろう。ほぼ同時に

「メダチェンジッ！」

叫びを上げる。二機のKBTが同時に光に包まれ、須臾の空隙の後
に、

「掻き消せ、ビートル！」

「させるか！ゼリア、回避しつつクロスセット！」

ズガガガガガガッ！

大気を震わせる程の射撃がBビートルから放たれ、ゼリアはそれを
回避しながら砲台を設置し、凄まじい機動性で俊敏に動き回る。大
量の砲台を設置し終えたのを確認したシデンは素早く視線を巡らせ、

「 $\alpha \cdot \beta \cdot \gamma \cdot \delta$ はビートル、 $\varepsilon \cdot \lambda \cdot \mu \cdot \nu$ はスタッグ照準！」

大声で叫ぶ。同時にルミナが、鐔ぜり合いをしていたBスタッグの右腕を摺り上げて、から空きになった胴体に蹴りを叩き込んだ勢いで緊急離脱する。そして、

「ファイヤー！」

再び響いたシデンの声すら掻き消す程の轟音と共に、大量の砲弾が降り注ぐ！派手に立ち上る土煙の中を睨みながら、しかしシデンとカスミの表情は曇ったままだった。

「ルミナ、メダチェンジだ」

カスミの命に応えたルミナがメダチェンジを終え、メダフォースを溜めていた時だった。漸く晴れてきた土煙の中から、荒々しい声が響く。

「おーおー、やるじゃねーか。流石に死んだかと思っただぜ」

「全くだ。意外と効いたな、アレは」

晴れた土煙の中には、ほとんど損傷の無いBスタッグとBビートルの姿が。セルリアーノは微笑みを浮かべると、

「なかなかやりますね、貴方達も。本気を出しても良い位ですが、生憎時間が押しているものですから、この辺で失礼させていただきますよ」

言うが早いかBビートルを伴って踵を返し、青いスパークが瞬くと同時に姿を消した。エレクトラはまだしばし逡巡している様子であ

ったが、

「行く、ぞ。スタッグ」

「残念だぜ。今度こそ、きっちりケリつけようぜ！」

Bスタッグと共に赤いスパークの奔流に身を投じ、姿を消した。

「何だっただんだ？あいつらは」

それから暫くして、ゼリアを収めたシデンは誰に言うでもなく呟いた。カスミはルミナのソードがスラフシステムによって修復されてゆくのをぼんやり眺めながら、

「解らないよ。けど、一つだけ言える事があるとすれば…あいつらは、これから起こる“何か”を知っている筈だ」

仮説でありながら、確信めいた口調でいらえた。

幕間巻：四機の“黒”（後書き）

ふふ、うふふふ…！

「気味の悪い笑い声を上げるな、阿呆め」

これが笑わずにいられるか？四機のブラックシリーズが一堂に会したんだぞ？

「その割には、随分やつつけ仕事だったじゃないか」

仕方ないだろう。本編より短い分量に収めようって決めてるんだから、幕間は。

「まあ、上下二部構成にする訳にもいかないしな」

それに、お前もゼリアも二重リミッターをかけてあるだろう？あんな状態であのまま戦ったら、それこそ木っ端微塵だろ。

「確かに」

だから、仕方ないのさ。決戦はまたの機会に持ち越した。

第肆話：お買い物大作戦（前書き）

展開、どうしようかなあ

反応見てから、決めようかなあ

第肆話：お買い物大作戦

着替えるのも億劫だった、というより女の軀となった事を実感した
くなかったミズキは、結局その日はそのままの恰好で眠りに就いた。

そして夜は明け…

「う…ん」

「ね、可愛いでしょ？」

「確かに。その幽霊さん、かなり良い仕事したわね」

「恐るべし、だな」

「うう…。ミズキの癖に生意気かも…」

「写真撮っても大丈夫かしら？」

なんか頭上から複数の女性のものと思しき声が降って来る。夢うつ
つのミズキはうつすらと目を開け、

「あ、お早お〜」

「……………ふえ？…………ひゃあああ!？」

寝顔をのぞき見られていたと知り、思わず可愛らしい悲鳴が迸る。
跳び起きたミズキは耳まで真っ赤に染め、

「なつな何やってるんですかつ!？」

凄まじい勢いで壁際まで退避すると、荒い呼吸を整える。侵入者の面々を見てみると、キララとカナ以外の三人が知らない顔である。ミズキが不審そうな表情を見せているのを見留めたキララは、

「えっと、ミズキ君は三人共知らなかったよね。…まず、ピンクのオーバーオールを着てるのが、甘酒アリカちゃん。イツキ君のお友達で、ジャーナリスト志望の女の子よ」

キララが紹介すると、アリカは人懐っこい笑顔を浮かべて握手を求めてきた。それに応じながら、ミズキは視線でキララに先を促す。

「こつちの子がコハルビ ヒヨリさん。カスミ君の幼なじみよ」

キララはショートヘアで活発そうな印象を受ける女性を紹介し、

「で、こちらがフブキさん。RR社の社長秘書をやってるのよ」

最後に、腰まで届きそうな程の長髪をアップにして前髪をヘアバンド代わりのサングラスで持ち上げた、理知的な雰囲気的女性を紹介した。

「…で、皆さんは何をしてるんですか？」

警戒心剥き出しのミズキが推何すると、カナは待つてましたとばかりに手に持っていた紙袋をまさぐり、

「じゃじゃーんっ!ミズキちゃんを着替えさせてあげるためよっ!」

カナらしからぬ程可愛いワンピースだとか下着だとかを取り出した。

「下着…？」

目の前に躊躇無く突き出された小さな布地を見ながら、ミズキの視界は再び暗転した。

「う…ん」

ミズキが目を覚ますと、そこは自室ではなくリビングだった。軀を起こしたミズキは、何となくぼうつとした思考のまま自分の着ている純白のワンピースに視線を落とし、

「……」

「あら、目が覚めた？」

「あきやあああああああ！？」

絹を裂くような悲鳴を上げた。飛び上がる程びっくりしたカナは思いつきりミズキの頭に拳骨を振り下ろす！

「やかましいッ！」

「いたっ！」

左耳を押さえたカナは右の拳を固く握りしめたままでミズキをキッ

と睨みつけ、

「バカミズキっ！いきなり耳元で大声出さないでよっ！」

悪鬼羅刹もかくやという形相で詰め寄る。蛇に睨まれた蛙よろしく完全に萎縮してしまったミズキは「ひうつ」と、喉の奥で竦った悲鳴をあげた。

「だ、だって、だっていつの間にかワンピースに着替えさせられるし」

今にも泣きだしそうな声音で喋り出した哀れなミズキは自らの栗色の髪に手を伸ばし、

「あつ、あまつさえツインテールになってるんだもんっ！」

自らの側頭部から伸びる二房の尻尾に触った。ミズキはカナを睨み、

「ポニーテールが良かったのにっ！」

逆に詰め寄った。

いや、それは違うだろう…。

気圧されたカナは、渋々ツインテールを解いてポニーテールに結び直す。似合ってたのになあ、なんて思っていたカナだったが、流石に口には出さなかった。

結びあがった髪を上機嫌でいじっているミズキに、ようやく起きてきたと思しきセラフが尋ねる。

「しっかり適應してるじゃないですか。もう諦めたんですか？」

「まあね。幽霊さんと連絡がとれない以上、この状態から脱却しようがないんだ。だったら慣れた方が楽だろう?」

そう言いつつもやはり恥ずかしげな様子のミズキを見ながら、セラフは溜息と共に窓の外を見遣る。無窮の蒼天が広がる夏の朝は、一体何を知っているのだろうなどと考えてしまふ、詩人なメダロットであつた。

キララが運転するライトバンに乘せられたミズキ達は、ヒノモト町とメダロポリスの中間地点に新しく建設された超大型ショッピングモールへと向かった。理由は言うまでもなくミズキに服を買ってやる為なのだが、

「ボクの服代つて、もしかして自腹ですか?」

いくらなんでも中学生の小遣いで何着も服が買える訳もないのだが、などと思うミズキ。キララはからからと笑い声を上げると、

「大丈夫よ。シヅノさんが経費で落してみせるから、なんて言うてたし」

本当に大丈夫なのか?というかメダロット社の経理はどうなってるんだ?と思わずにはいられない事を平然と言つてのけた。

買い物自体は恙無く終了し――とはいってもゴスロリやメイド服、チャイナドレスや水着にワンピースタイプのドレスなど、色物系がやたらと充実していたのが気にはなったのだが――、一度荷物を車にしまつてから少し早めの昼食を楽しむ運びになつた。

フードコートで思い思いの料理（流石に自腹）を注文した一行は、
歓談しながらの食事を楽しんでいた。

「そういえば、ミズキってメダロツチ持っていないよね。なのにセラ
フは言う事聞いているのよね。なんでかしら？」

ふとカナが発した問いに、全員が首を傾げた。そういえば、という
表情である。

「何でだろうね？」

「さあ。よく分からないです」

セラフは首を傾げて答えながら右腕のソードを眺めていたが、いき
なりジャキイイイン！という凄まじい音と共にクワガタの顎よろ
しく刀身が開き、

「ひゃあっ！？」

吃驚したセラフはこてんと後ろ向きにすっ転んだ。苦笑を漏らした
ミズキが口を開き、何かを言いかけたその時、

ズウウウウン…！

地震とは明らかに異なるイレギュラーな震動がショッピングモール
全体を震わせ、その場に居た全員の意識を集めた。

「なっ…、何？」

「分からないけど、ロクな事件の前触れじゃないって事だけは確か

ね」

カナの悲鳴じみた声に、忌ま忌ましげに舌打ちをしたヒヨリが応じる。徐々に騒ぎが大きくなっていったフードコートから足早に出た一行が目にしたのは、

「このショッピングモールは我々ロボロボ団が占拠したロボ！大人しくしていれば危害は加え無いから、じっとしているのをオススメするロボ〜！」

大声で叫びながらこちらに向かって来る、全身黒タイツに、天に向かって伸びるアンテナの様な角を生やし、さらにサングラスを掛けた見るからに怪しい二人組の姿であった。

「な、な…」

「なんじゃありゃーッ!？」

ミズキとカナがほぼ同時に叫びを上げ、

「やっぱり…!」

キララは不快感に唸る。

「あれは…？私、あの人達を何処かで見た事がある気がします…」

セラフが頭痛がしたかの様に頭を押さえ、ふらりとよろめいてミズキにもたれ掛かった。ミズキの横に立っていたヒヨリは寧猛に笑うと、

「やっぱり、こういう時は先手必殺！いくわよ、フブキ！」

「ああ、任せておけ」

「メダロット転送！」

フブキと息を合わせてメダロットを転送した。ヒヨリの前に立ったのは、両腕に自身の身の丈並の打突部分を誇るトンファーを装備した、青と白のカラーリングが目を引くメダロット。一方のフブキの前に立ったのは、一見して天道虫型と分かるフォルムを持った、鮮やかなクリムゾンレッドのメダロットだった。ヒヨリはロボロボ団員がまだこちらを視界に捕らえていない事と、彼らが既にメダロットを転送済みである事を確認し、

「今よっ！オプチ、《アクセルロード》！」

「はいなっ！」

両者の距離が一定迄縮まった所で、叫ぶ様に命令を発した。それに応えたオプチ・「ブレザーメイジ」は低い姿勢のまま駆け出し、

「なっ、何だロボっ！？」

「でやああああっ！」

先ずより近い方にいた「ソーディアン」を激しくスパークする右腕のトンファーで殴りつけ、

【頭部パーツダメージ50、機能停止します】

「《クレイヴロード》！」

さらに返す刀で、左腕の氷を纏ったトンファーをもう一機の脚部に叩き込む！

【脚部パーツダメージ55、機能停止。左腕パーツダメージ20、機能停止。更に停止ペナルティーが付加されます】

「フブキっ！」

「判っているさ。レディ、《トライフラッシュ》だっ！」

フブキの命を待たずに左腕を水平に構えていた「レディアント」は、一切の感情を感じさせない複眼状のカメラアイで氷に全身を覆われた敵を捉え、

ズガガガガガッ！

凄まじいマズルフラッシュと共に放たれた一撃が、過たずソーディアンの頭部を吹き飛ばす！

【頭部パーツダメージ50、機能停止します】

突然の出来事に呆氣にとられる二人のロボロボ団員。ヒヨリはフブキと視線を交わすとはば同時に走りだし、

「「でやあああっ！」」

神速の蹴撃を鳩尾に叩き込む！

全身をグルグル巻きにされたロボロボ団員から事情を聞き出したヒヨリは、

「全く、嫌になるわ。携帯は圏外になってるし、交通規制までされてたらこの異変に気付くのは時間がかかるわ。本ツ当に忌ま忌ましいわねっ！」

犬歯を剥き出しにして二人を睨む。チワワの様に震えている哀れなロボロボ団員。フブキは彼等を一顧だにせず、

「どうだろう、私達でロボロボ団を叩くっていうのは？いずれ助けが来るにしても、安全は確保したいからな」

飽くまで冷静な表情を崩さずに言っただけのける。アリカもこくりと頷き、

「そうね。一応あたし達でやるだけやってみましょ」

ヒヨリ同様に獰猛な笑みを浮かべた。キララはミズキとカナの方を振り返り、

「良い？二人共、ここから動いちゃ駄目よ。もしもの事があつたら、悲しむのは御両親なんだからね」

優しい微笑みを浮かべ、諭す様な口ぶりで語りかけた。ミズキがしっかりと、カナが不承不承頷いたのを確認したキララはにっこりと笑い、

「よし、それじゃあ行きましょー！」

颯爽たる足取りで、フードコートを後にした。

第肆話：お買い物大作戦（後書き）

いやっほう！後書きだぜ後書きっ！今回は、俺がメダロットnaviの正ヒロインと信じて疑わないクールビューティ、フブキさんにお越し頂いたぜ、だぜっ！

「少しは落ち着いたらどうなんだ？」

そりゃ無理だぜ！だって大好きなんだフベツ！

注、殴られました

「で、これからの展開、どうする積もりなんだ？前書きでも言ってたが」

うふふ、殴られるのも良いかも…

「聞いているのか？答えないなら蜂の巣にするぞ」

ひええ。

ええと、現状では2パターン考えてるんですがね、どっちにするかが決まってないんだよ。もういつそ、コイントスで決めようかなあ…

「殴られたいみたいだね」

うわあ、嘘です嘘です。ちゃんと考えて決めますよあ。

「全く、駄目なヘタレ作者だな」

罵られるのも悪くないかも…

ターンッ！

あれ…？

なんで、しかい…が

おれは、しぬ…のか？

さくしゃ…なのに…

第伍話：戦乱の攻勢 - 序（1）（前書き）

いやー、随分遅くなってしまった！色々立て込んでたせいなんです
が、申し訳ない！

第伍話：戦乱の攻勢 - 序 (1)

Side Arika

「あーあ、今頃キララさん達は派手に暴れまくってるんだろうなあ。いいなあ」

若干ナイーブになっているアリカを慰めるのは、

「他所様と比較したって始まらないよ。私達には私達なりの戦いしかたがあるんだし、ね？」

長年熾烈を極める戦場を共に戦い抜いてきたパートナーだ。アリカは苦笑を浮かべながら、

「ま、言うだけ詮無き事よねー。じゃ、お互い頑張ろ、プラス」

からからと笑い、パートナーの名を呼ぶ。

そんな彼女の相棒だが、普段装備しているSLRシリーズのパーツは装備していない。ならばVALシリーズのギャラントレディなのかと言えば、そうでもないのだ。

VAL-ONF「ノエル」。それが、プラスの新しい姿だ。

設計段階においては当代最強の格闘戦メダロットになりうるポテンシャルを与えられていながら、開発時に発生した深刻なバグの影響で、その性能の半分を下回る実力を発揮する事しか叶わなかった悲運の機体である。

アリカはその機体を引き取り、メダロット博士と共に改修を施した

のだ。お陰でカタログスペックを100パーセント発揮する事が可能になっただけでなく、いまではワンメイク物の特権とも言える採算度外視のチューンナップを施されている。

それは例えば変形後の推進値の大幅増強であつたり、頭部、或いはドライブAの回数の増加であつたりと、枚挙に暇が無いほどだ。メダフォースをフルチャージしたプラスはちらりとアリカを仰ぎ見、即座に変形を開始する。

「数は3かな。さつきヒヨリさん達が相手したのと同型だから、そんなに装甲は固くないはず」

アリカは視線の先のロボロボ団が転送しているメダロットを睨みながらつぶやき、

「今よ！プラス、先頭にドライブAッ！」

三体のうちの中央、恐らくはリーダー機たる証左であろうマント状のパーツを両肩から垂らした機体が出た瞬間を狙って指示を飛ばす！

その声に無言で応えたプラスは、後部に搭載された双発のブースターとメインスラスターから、戦闘機が発するような甲高い唸りを発する。放射される莫大な熱量を物語るかのように、スラスター付近は陽炎の様に揺らめいていた。そしてその唸りが頂点に達すると同時に、

ドッパアアーン！

爆弾が炸裂したかのようになく爆音を残し、プラスは敵に向かって突撃する！

「な、何だロボ!？」

そして、爆音に気付いたロボロボ団員が狼狽え騒ぐより早く、衝撃波の嵐が吹き荒れた。吹き抜けに面した手摺の下部に嵌め込まれた硝子は粉々に砕け散り、煽りを受けた二機の「ソーディアン」と三人のロボロボ団員は枯れ葉の様に宙を舞って壁面、あるいは床に叩きつけられてそのままびくりもしない。しかし、何より悲惨なのはリーダー機であろう「ソーディアン」だ。直撃を受けた胴体前面はパーツが粉々に砕け散って吹き飛び、ティンペットも僅かながら凹んでいる。その他の部位にしても大した差が有るわけが無く、両腕パーツは大きなひび割れが目立つばかりか、接続部分が破壊されたのか右腕はマッスルケーブルが露出している。頭部も全体にひび割れが走り、カメラアイを覆うバイザーは砕け散って痕跡程度しか残らず、その奥のカメラアイも、レンズに細かい罅が出来ている所為で白く濁っていた。深刻なのは脚部パーツで、スレンダーな装甲の大部分が剥がれ落ち、関節部は完膚なきまでに破壊され、マッスルケーブルも断裂寸前でなんとか持ちこたえているような印象を見る者に与えていた。

変形を解除したブラスは慈しむ様な視線を「ソーディアン」に向け、「私達は貴女のマスターに危害を加えたりはしません。それだけは確約します」

ポン、と肩を叩いた。すると、

「あり、がとう……」

それを合図にしたかのように、ロボロボになりながらも立っていた「ソーディアン」のカメラアイから光が消え、糸を断ち切った操り

人形のようにその場に倒れ込んだ。
その様子を見ていたアリカは、

「メダロットは良い娘なのに、メダロッターが悪人だから倒さなくちゃならない……。あの娘に罪は無いのにね」

そう呟いて、複雑な表情を浮かべるのだった。

Side Kirara

一方その頃、キララはまだメダロットを転送せず、足音を殺して歩を進めていた。理由は簡単で、彼女の使用するとある多脚型メダロットは、やたらと物音を立てすぎるからだ。

今キララがいるのは東西南北4つのブロックに分かれている中の北側、Dブロックである。因みにアリカはA、ヒヨリはC、そしてフブキはミズキ達のいるBブロックを担当している。

彼女が目指している場所は、ブロック中央にあるイベントホール。ロボロボ団員の動きはホールから出て食料品や現金等を強奪し、ホールに戻って物資を積み、再び強奪に出るという単純なものであり、そこを叩けば指揮系統を麻痺させる事が可能と踏んだからだ。

知らぬ人が見れば無謀極まりない愚挙に映るかもしれないが、彼女のメダロットの圧倒的な戦闘能力と自身の持つ運動神経とロボトルセンスに依拠する自信が、キララにこの行動を選択させたのだろう。

キララはホール内部の様子を確認すると、まず物陰に隠れてメダロットチを操作し、かつてRR社社長であるシデンから貰ったロットチポールを2つ呼び出す。近接型と遠隔・近接両刀ビルドのメダルを搭載したそれらは、キララの手から離れるや否や宙に浮かび、カメラアイをチカチカと点滅させ始めた。

『よし、大丈夫。私は出来る、やれば出来る娘よ。ファイト、おー』
気合いを入れる秘密のおまじないを小声で呟き、キララは弾かれた様に飛び出した。ホールの入口に向けての最短距離を疾風の様に駆け抜け、

「天駆ける太陽の煌き、必ッ殺！プロミネンスッ！」

彼女がホールに飛び込むと同時に、天井をぶち抜いて飛来したビームが、ステージの中央にうず高く積まれていた物資を纏めて焼き払った。
思わず硬直したキララだったが、咄嗟に天井に空いた大穴に目を向けた。

「彩りましょう食卓を、皆で防ごうつまみ食い！」

そこから響いた大音声と共に、真紅と瑠璃色、そして漆黒の影が飛び込んで来た。優に20メートルはありそうな高さから降りたにも関わらずバランスを崩す事すらなく着地した3つの影は、

「常温保存で愛を包み込むカレーなるメダロットー、快盗レトルト
只今参上！」

鮮やかに登場のポーズを決めた。

「ヒカ……じゃなかった快盗レトルト！あなたこんな所で何やってるのよ！」

夫が突然現れた事に動揺を隠せないキララだったが、

「そんな事より、後ろ後ろ」

ヒカル——レトルトのおちよくる様な声には流石の反応を見せ、

「アトス、デスブレイクッ！」

瞬時に転送した「ゴッドエンペラー」、アトスに指示を飛ばす。背後に迫っていた「ソーディアン」に一撃でパーツ全損の大ダメージを与えて退場させたアトスは周囲を取り囲むロボロボ団員達を威嚇する様に睥睨し、

「キシヤアアアアッ！」

研ぎ上げた刃に勝るとも劣らない殺気をばら蒔いた。

「で、何で此处にいるのよ」

更にポルトス、アラミスも転送したキララはロッチボールが転送した「シンセイバー」と「ゴーベンケー」に周囲を牽制させつつヒカルに尋ねる。すると、彼は仮面を被っていてもへらへらしているのが丸分かりな声音で笑い、

「そりゃあ、僕の奥さんが危ない事をしようとしてるんだもの、黙って見てる訳にはいかないよ。……それに」

不意にその笑いを納めたかと思うと、急に底冷えする程酷薄な声音で

「“奴”が復活させた新生ロボロボ団が、どの程度の物が推し量ってやろうとおもってね」

吐き捨てる様に呟いた。そして、目の前に立つ二機のメダロットに視線を向ける。キララは「アークビートル」の事は知っていたものの、もう一機の瑠璃色のK W Gには見覚えが無かった。なので、

「ねえ、その青いK W Gって新型？」

アトス達に「取り敢えず敵対勢力を殲滅」と指示を出してから、ヒカルに疑問をぶつけた。

「うん。あいつはメダロット社から新しく発売予定の、「メタリフェル」っていう機体のプロトタイプだよ。縁が深いって事で、僕がこいつ、イツキ君がK B T型の試運転を任されたんだ」

「メタリフェル」が右腕に装備された細く、長いクワガタムシの牙を模したソードを振るう度、寸断されたパーツの山がどんどんうず高くなってゆく。

「ふむ。素晴らしい性能だな、この身体は。反応速度と追隨性が格段に高い」

そう呟くのは、今まで「ロクシヨウ」のボディに収まっていたヒカルのパートナーだ。彼は突然体勢を低く沈めると、

「覇ッ……!!」

裂帛の気合いと共に、神速の左突きを放つ！顔面に拳を突き立てられた「ソーディアン」が力無く崩れ落ちるのを一顧だにせず、

「開幕と逝こう」

「メタリフェル」は堂々たる姿で宣言した。

第伍話：戦乱の攻勢・序（１）（後書き）

はい、毎度お馴染みの後書きです！今回はノエルのボディで復活を遂げたプラスちゃんの登場だッ！

「ええと、宜しくお願いします」

さて、実は今回の主人公機であるセラフは、ノエルのデザインを参考にして書き上げたんだぜ！

「ふむふむ」

それでもって、メダナビにおけるノエルの不遇さに涙を禁じ得なかった俺は、いつも近接戦闘時にVALシリーズを装備する君に、彼のパーツを装備して貰う事に決めたのだッ！

「成る程、愛ゆえにですね。ところで」

うむ？

「いつもみたいなのはっちゃけテンションじゃないんですね」

……いやあ

「どうしたんです？」

お恥ずかしながら、久々の投稿のせいで、今までのテンションを掴めないんだぜ

「……自業自得ですね」

いやあ、重ねてお恥ずかしい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304/>

メダロットHorizon

2011年9月7日20時03分発行